

令和7年度 能美市立宮竹小学校 学校評価

重点目標 (目さす姿)	具体的方策	主担当	【評価指標】 (成果指標) (努力指標) (満足度指標)	【評価の根拠】 達成度判断基準	前期評価	後期評価	分析・課題(2学期)	具体的方策(3学期)	ご意見をお願いします
1 組織的な学校運営 (チーム学校の推進)	①【目標達成に向けた組織力の向上】 「プロジェクトM」を核として、目標を共有して連携・協働する。検証・改善の視点を絞ったPDCAサイクルを積み重ね、効果的な教育活動を行う。	教務主任	【満足度指標】 「プロジェクトM」を核にして焦点化した取組を組織的・計画的に積み上げ、児童の変容を実感している。	【教職員アンケート】 目標達成に向け、主体的に協働し、児童の姿の変容から教育的効果や自己の資質能力の向上を実感できたと肯定的に回答する職員の割合。 <A:90%以上, B: 80%以上, C:70%以上, D:70%未満>	<教職員>A AB: 100%	<教職員>A AB: 100%	2学期においても教職員の評価は、肯定的評価が100%であり、評価はAであった。校内研修会、校務委員会、フロア学年会といった会議や日常でも各主任を中心に学校教育目標の実現に向けて話し合い、学校組織として計画的に運営することができた。しかし、校内委員会の運営の仕方やプロジェクトMにおける議題の選定の仕方に課題が残った。	まず、校務委員会においては、次回の職員会議の議題について事前に確認するようにするとともに、プロジェクトMのレジュメには議題を先に明記して、必要に応じて協議する流れを構築していく。校務委員会→プロジェクトM→職員会議の流れをより明確にして、全職員が安心して提案をすることができるようにしていく。	
	②【安全・安心な学校づくり】 いじめ・不登校の未然防止と諸課題に対して組織的に迅速に対応する。各種実践的な研修の実施により職員の危機意識と対応能力を高める。	教頭	【努力指標】 ・日常的な情報共有による全教職員体制での見取りと迅速な報・連・相に努めている。 【努力指標】 ・学期に1回以上の児童と地域の実態に即した実践的な研修実施により、職員の危機意識と対応能力が向上している。	【教職員アンケート】 ・日常的な情報共有により、児童の実態に即した対応に努めるとともに、諸課題に対する迅速な報・連・相と対応を行ったと肯定的に回答する職員の割合。 <A:90%以上, B: 80%以上, C:70%以上, D:70%未満> 【教職員アンケート】 ・実践的な研修により、危機意識と対応能力が高まったと肯定的に回答する職員の割合。 <A:90%以上, B: 80%以上, C:70%以上, D:70%未満>	<教職員>A AB:100%  <教職員>A AB:100%	<教職員>A AB:100%  <教職員>A AB:100%	AB100%に変わりはないものの、A回答が58%から77%に向上しており、組織全体として危機意識高く対応できたと考える。欠席が続く児童や不登校に至る児童はなく、全教職員間での迅速な情報共有と連携による組織的対応の成果と考えられる。	今後も全教職員体制での児童の見取りと対応を継続し、諸課題への未然防止、早期対応に努めていく。防災訓練については、外部講師を招いて、引き渡し訓練と隔年で、児童・保護者・教職員での実施ができないう検討中。	全体的に、相乗効果でうまく回っていると感ずる。安全・安心な学校づくり、よりよい学校づくりに協力して行きたい。1クラスが少人数なことで、先生方が1人1人をしっかり見て指導できているのはとてもよい。
	③【業務改善と働きがいの実感】 学校DXを推進し、効率的な情報共有や各会運営の工夫と業務の平準化を図る。連携・協働により児童の育ちと達成感を共有し、自分たちでウェルビーイングな職場を創る。	教頭	【成果指標】 時間外勤務時間が2カ月連続で45時間を超える教員が0人。 【努力指標】 効率的な業務遂行により、ワークライフバランスを実現している。	【勤務状況一覧表】 A: 0人 B: 1~2人 C: 3~4人 D: 5人以上 【教職員アンケート】 効率的な業務遂行により、ワークライフバランスを実現していると肯定的に回答する職員の割合。 <A:90%以上, B: 80%以上, C:70%以上, D:70%未満>	<教職員>B  <教職員>B AB: 83.3%	<教職員>A  <教職員>B AB: 84%	9月以降、時間外在校等時間は平均25時間を下回り、45時間を超えた月が1回の教師は二人に留まっている。各会議を効率的に実施できたことに加え、日々の効率的な業務遂行が定着し、働き方に対する意識改革が進んだ結果と考える。	今後も随時改善を加えながら、現在の取組を継続する。教職員のワークライフバランス、心身の健康維持に努め、教師のウェルビーイングと子供たちのウェルビーイングを実現する学校づくりを進めていく。	
2 知(主体的・協働的で深い学びの実現)	①【授業改善】 児童が自己調整力を働かせながら主体的に学びに向かう授業を実践する。児童の数学的な見方・考え方を引き出すための単元構想と授業設計を行う。	研究主任	【成果指標】 ・算数の学期末テストで80点以上の児童の割合、思考・判断・表現を問う問題の正答率で評価する。 【満足度指標】 ・学期に1回以上フロア学年会を設定し、児童が数学的な見方・考え方を働かせながら主体的に学びに向かう授業を実践するための教材研究と単元構想を行う。	【学期末テスト・評価テスト】 ・算数学期末テスト、評価問題の[思考・判断・表現]観点で80点以上の児童の割合で評価する。 <A:90%以上, B: 80%以上, C:70%以上, D:70%未満> 【教職員アンケート】 ・児童が主体的に学びに向かうために、単元全体の見通しを持って算数科の授業を実践することができたと肯定的に回答する職員の割合。 <A:90%以上, B: 80%以上, C:70%以上, D:70%未満>	D60% 算数学期末テスト、評価問題の[思考・判断・表現]観点 <教職員>A AB: 100%	C77% 算数学期末テスト、評価問題の[思考・判断・表現]観点 <教職員>A AB: 100%	2学期においても、算数の学力状況を「思考力・判断力・表現力」に重点を置いて確認した。その結果、学期末テストで80点以上を取った児童は77%に上昇したが、基準としていた「8割以上」には達しなかった。ただ、チャレンジ問題においても72%の達成率で、1学期よりも確実に力を付けてきている。児童が主体的に学べるよう、単元全体の見通しを持った授業を実践できた。今後は、子どもが既習事項を自ら活用して学びを深められるよう、授業改善の視点をより大切に単元構想の研究を進めていきたい。	3学期は、児童が既習事項を自ら活用し、学びを深める力を高めるための具体策を講じる。算数の授業中、重要だと感じた考え方や汎用性の高い学び方を名刺サイズのカードに書き溜め、自分だけの「既習フォルダ」を作成する。次の学習時にこれらを活用して自力解決に挑むサイクルを全校で推進する。自己調整力を視覚化し、「既習をつないで学びを進めること」を意識させる単元構想と授業改善を継続し、思考・判断・表現力の向上を図りたい。	
	②【基礎基本の定着】 朝学習・フォローアップタイム・家庭学習を連携させ、組織的に基礎基本の力を高める。担任任せにせず、学校全体で継続的に点検・改善を図る。	教務・研究	【成果目標】 年間を通じた漢字・計算テストの平均点が80点以上であること。また、児童が学習習慣を身に付け、基礎的内容を確実に習得していること。	【基礎基本定着検証テスト】 ・漢字・計算テスト及び単元末テストの[知・技]観点で80点以上をとった児童の割合で評価する。 <A:90%以上, B: 80%以上, C:70%以上, D:70%未満>	<検証テスト>B 漢字 60% D 算数 80% B	<検証テスト>B 漢字 82% B 算数 81% B	基礎基本の定着について、漢字50問テストで80点を超える児童の割合は全校で82%で、算数の単元テストにおいても全校で81%で目標に到達することができた。算数においては、単元テストを意識した単元構成の工夫について校内研修し、単元における資質能力を意識しながら授業を行うことができた。漢字においては、1学期の反省を生かして漢字の定着を意識した漢字指導を行う学年が多く、結果に反映された。ただ、全校における取り組みになっておらず、共通実践できる取り組みを考える必要がある。	2学期に成果のあった学年の取り組みを参考に全校で取り組むことができるようにしていく。また、算数においては、思考・判断・表現を問う設問に課題が見られるので、より一層の単元構成の工夫や図の指導を提案していく。また、引き続き家庭学習強化週間の際に、保護者に家庭学習の意義や認める声かけの大切さをより伝えて、特に支援が必要な児童の保護者には個別に連絡をしたりして、協力や見守りをお願いする。	前回の授業参観で、時代が進んでいることを感じた。廊下や階段の掲示板にある図工や教科の作品から、子どもらしい発想や表現の素晴らしさと、どの子も深く学んでいることが伝わってくる。
	③【読書活動の推進】 学校や家庭での読書活動を推進し、読書習慣を育てながら、読書の量や質の向上を目指す。	図書担当・司	【成果目標】 「10冊チャレンジ」「分類チャレンジ」等、学年に応じた年間の取組において学期に3冊以上読書をしている。	【取組の達成率】 ・学期に3冊以上読んでいる児童の割合。 <A:90%以上, B: 80%以上, C:70%以上, D:70%未満>	到達度 B 1・2年 100% 3~6年 79.6%	到達度 A 1・2年 87% 3~6年 95%	全校児童の91%が、学年に応じた取り組みにおいて目標を達成することができた。6年生のブックトークや図書委員会の取り組み等の推進活動や、教職員の声かけの成果があったと考えられる。	2学期末に図書委員会で実施したビブリオバトルが児童たちの読書活動への良い刺激となっていたので、引き続き3学期も実施予定。また、取り組み目標が達成していない児童には担任から声掛けを行ってもらう。	

3	徳 (信・任・認による豊かな人間性の育成)	①【魅力ある学校づくり】 あらゆる教育活動において「生徒指導の4つの視点」を意識し、児童の達成感と意欲につなげ「信・任・認による魅力ある学校」を創る。	生徒指導 プロジェクト	【満足度指標】 児童アンケート（「魅力ある学校づくり」4項目参照）をもとにしてPDCAを実働化し、児童のA評価が増える。	【教職員アンケート】 ・児童アンケートA分析のPDCAを通して「信・任・認による子どもが主役」の学校づくりに参画していると肯定的に回答する職員の割合。 <A:90%以上, B:80%以上, C:70%以上 D:70%未満>【児童アンケート】 ・A評価が4項目とも4割超える。または増加している。 <A:4項目, B:3項目, C:2項目:D:1項目>	<教職員>B AB:88.9%	<教職員>B AB:88.9%	成果 みりよくアンケート4項目（学校が楽しい、みんなで何かするのは楽しい、授業に自分から進んで取り組んでいる、授業がよくわかる）ともAの「よく当てはまる」の割合が増加した。このことから、教職員間での取り組みの具体や教職員と児童で目指す姿の共有ができていと考えられる。 課題 職員室やフロア学年会などで取り組みの内容や成果を話し合っているが、そのことを共有する場を設定することがあまりできなかった。	生徒指導主事が中心となって、授業の中で視点を意識した教師の働きかけや目指す児童像にせまっている児童の姿をチャットなどを通じて全体に向けて発信し、共有していく。児童に対しても教師が見つけたすてきな姿を掲示し、紹介していく。	縦割り活動は大変よい。1年間の積み重ねの中で、上下関係や思いやりなどを学ぶことができていく。とても素敵な機会、今後も大事にしてほしい。
		②【PDCAが実働化する集団づくり】 縦割り学習活動等について、児童と目標を明確に共有し、「信・任・認」を効果的に実現することで、主体性・協働性や自治的精神を育成する。	児童会・担任	【満足度指標】 縦割り学習活動等を通して「信・任・認」を効果的に行うことで、児童が自己有用感と学校全体の共感的人間関係や、自治的精神の向上を実感している。	【児童アンケート】 縦割り活動等での他学年との交流を通して、達成感を味わったり学校がよくなっていると感じたりすることができたと肯定的に回答する児童の割合。 <A:90%以上, B:80%以上, C:70%以上 D:70%未満>	<児童>B AB:88.1%	<児童>B AB:88.1%	成果 児童の「あまり当てはまらない」「当てはまらない」の割合が減り、「当てはまる」の人数が増加した。このことから、縦割り活動等での他学年との交流を通して、達成感を味わったり学校がよくなっていると感じたりすることができた児童が増えたといえる。 課題 縦割り班を活かした活動に取り組んできたが、このまま縦割りでの良いのか、他に縦割りを活かせるところがないか考える場面が少なかった。	特別活動主任が中心となって、各委員会や児童会と連携を図り、縦割りを活かせる企画を考える。行事ごとのふりかえりで縦割り班を活かすよさや改善点をふりかえる。	家では1人である子ども、学校で1～6年生が一緒になって、わいわい騒いだり話したりできるのはとてもよい。C館で異学年が関わりあうこともいい。
		③【「ダイバシティ教育」の充実】 総合的な学習の時間、GCPや道徳教育、キャリア教育等を通じたダイバシティ教育の充実により、多様性を尊重し理解する心を育む。	キャリア教育担当	【成果指標】 年間学習計画における位置づけや日々の指導支援により、児童の意識の変容を図っている。	【児童アンケート】 「（自分・クラスは、先生は）分け隔てなく・お互いのよさを認め合うことができている」と肯定的に回答している児童の割合。 <A:90%以上, B:80%以上, C:70%以上 D:70%未満>	<児童>B AB 自分は88.8% クラスは87.2% 先生は91.7%	<児童>A AB 自分は91% クラスは94% 先生は94%	全項目で肯定回答が目標の90%を達成した。特に「自分」「クラス」の数値が上がっており、日々の教育活動を通して、多様性を尊重し互いに認め合う意識が育まれていることがうかがえる。「先生」については年間を通じて高い水準を維持している。今後はこの安定した土台を活かし、多様な価値観をより深く理解し、児童とともに「よりよい生き方（ウェルビーイング）」を探究する姿勢を大切にすることが必要である。	12月に実施した人権週間で読み聞かせをした本やその感想を展示し、一人でも多くの児童が、多様性理解に関心をもち、これまで知らなかった考え方や価値観に出会う機会をつくる。全体として高い信頼関係をベースに、年間計画に基づいて総合的な学習や道徳、キャリア教育等、日々の学習活動において、児童一人一人の細やかな成長を丁寧に見取り、ウェルビーイングな学級、学校づくりを推進していく。	子どもたちは本当に素直に育っている。これは、学校、家庭、地域でつくられたもの。このまま、中、高、大学へとそれぞれ進んでほしい。宮竹小だからできる、一人一人にあった指導は可能。
4	体 (健康で安全な生活習慣の自律)	①【体力向上】 体力アップ1校1プランに則り、「握力」を重点とする。新体力テスト実施種目と運動特性との関連から、1学期と2学期にスポチャレシャトルボールに継続して取り組み、体力向上に努める。	保健主事・体育担当	【成果指標】 個々がめあてを意識し、継続的にスポチャレシャトルボール（握力）に取り組み、体力向上に対する児童の意識の変容を図り、ベスト記録を更新している。	【児童アンケート】 ・「体力（握力）を高めるために、スポチャレシャトルボールに意欲的に取り組み、運動することができた」と肯定的に回答する児童の割合。 <A:90%以上, B:80%以上, C:70%以上 D:70%未満>【ベスト部門標準記録】 ・スポチャレいしかわの標準記録で評価する。 <4年A:90回以上, B:60回以上, C:40回以上, D:40回未満> <5年A:80回以上, B:55回以上, C:30回以上, D:30回未満> <6年A:100回以上, B:70回以上, C:50回以上, D:50回未満>	<児童>A AB:94.5%	<児童>A AB:99%	児童の評価は、肯定的評価99%で、評価はAであった。2学期においても、スポチャレシャトルボールを重点種目として取り組み、4年・5年では県の標準記録（ブロンズ）を達成した。「握力」では、1学期の記録と、2学期の追跡調査で実施する「握力」の記録から変容を分析した。その結果、4年男女、5年男女、6年男子は県平均を上回っており、記録の向上が見られた。6年女子においては、県平均の数値18.94に対して、17.77と県平均の記録に迫ることができた。今後は、県平均の数値を基準にして、一人ひとりの児童が体力を高め、記録の伸びを目指していく工夫が必要である。	3学期は、全校で体力強化を目指す取組を取り入れる。短なわとびでは、体育の時間の準備運動や休み時間の活動等で取り入れて、持久力強化及び全身の体力づくりの向上を図る。スポチャレいしかわでは、「8の字跳び」を重点種目として、県の標準記録（ブロンズ）の達成を目指す。1月には、縦割りグループを活用して、スポチャレいしかわの「8の字跳び」に全校で取り組む。児童会や体育委員会が中心となって、児童主体の活動機会を設ける。	自分たちの活動が子どもたちの役に立っていると思うと嬉しい。
		②【心身の健康力の向上】 心の健康を保つために、心の健康予防教育を中心に取り組みを推進する。	保健主事・養護教諭	【成果指標】 心の健康予防プログラムの授業を中心に、心の健康に対する児童の意識の変容を図っている。	【児童アンケート】 ・「授業などの取り組みを通して、学んだことを普段の生活で使ってみようと思ったり、使ってみたりした」と肯定的に回答する児童の割合。 <A:90%以上, B:80%以上, C:70%以上, D:70%未満>	<児童>B AB:89.7%	<児童>A AB:92.8%	夏休みのワークシートを提出した児童のうち、89%が授業内容を理解していた。また、児童アンケートでは9割が肯定的な回答をしており、学習内容を日常的に活用しようとする意欲が見られる。4年生の授業参観では、保護者にも内容を公開したことで、心の健康予防プログラムへの理解を深めることができた。	3学期には、2年生を対象とした授業公開を予定している。より多くの保護者に心の健康予防プログラムへの理解を深めたい。あわせて、冬休みの取り組みの結果を分析し、その成果と課題を来年度の計画に反映させていく方針。	挨拶運動で、お父さんが参加できないときに、中学生、おばあちゃんが代わりに参加していて感動した。宮竹校区は願いと協力してくれる風土があるのでは。
5	家庭・地域との連携 (地域とともにある学校)	①【開かれた学校づくり】 「学校運営協議会」を活用し、「ふるさとSDGs学習」をはじめ、学校・家庭・地域が協働して「みやっこ」の実現につながる取組を推進する。	教頭	【満足度指標】 学校運営協議会等を活用し、学校・家庭・地域が協働して「みやっこ」の実現につながる教育活動を実施し、地域の良さを実感している。	【教・児・保アンケート】 ・学校運営協議会等を活用し、「みやっこ」の実現につながる教育活動を充実し、「ふるさと」のよさを実感している。 <A:90%以上, B:80%以上, C:70%以上 D:70%未満>	<教職員>A AB:100%	<教職員>A AB:91%	後期においても、地域の方々の協力をいただくことで持久走練習および大会、彫刻刀指導支援や計算検定等、「みやっこ」の実現につながる様々な学習活動を安全に実施し充実させることができた。	3学期には1年生の昔遊びを予定している。6年生を送る会の中に感謝の会を設定し、今年度も安全・安心な学習活動、教師だけでは実現しない学びを支えていただいた地域の方々に感謝の気持ちを伝えるとともに、子供たちの成長を見ていただく機会とする。また、学校運営協議会についてCSディレクターに紹介してもらい、児童や保護者にも学校運営協議会の活動を知ってもらう機会とする。	委員になって初めて小学校で多くの地域サポーターが活動していることを知った。子どもたちの成長も見ることができた。
		②【特別支援・個に応じた支援の充実】 特別支援をはじめとする「多様性の理解」や各種機関との連携協働をすすめる、個や保護者に寄り添いよりよい成長につながるように努める。	特支コーナー	【努力指標】 特別支援を中心に多様性の理解や、個や保護者に寄り添いよりよい成長につながるための各種機関との連携協働に努める。	【教職員アンケート】 ・特別支援を中心に、個や保護者に寄り添いよりよい成長につながるための各種機関との連携協働に努めていると肯定的に回答する職員の割合。 <A:90%以上, B:80%以上, C:70%以上 D:70%未満>	<教職員>A AB:100%	<教職員>A AB:100%	特別支援教育の視点を中心に、関係機関と密に連携した支援を展開できた。保護者とも児童の状況を丁寧に共有することで、家庭と学校が一体となった成長支援に繋がっている。一方で、支援の効果が表れるまでに時間を要する事例もあるため、今後も中長期的な視点に立ち、継続的な見守りと支援を継続していく必要がある。	3学期も引き続き、各関係機関と緊密に連携しながら支援を進めていく。あわせて、校内においても迅速な情報共有を行い、教職員が一丸となって、子どもたち一人ひとりを見守っていく。	